

1

今年度の結果と取り組みについて

(1) 全国学力・学習状況調査

○●国語●○

<p>国語A (領域ごと)</p> <p>①口話すこと・聞くこと 概ね良好な結果であった。</p> <p>②書くこと やや課題が残る結果であった。</p> <p>③読むこと 概ね良好な結果であった。</p> <p>④言語事項 概ね良好な結果であった。</p> <p>(問題形式)</p> <p>①選択式 概ね良好な結果であった。</p> <p>②短答式 概ね良好な結果であった。</p> <p>③記述式 出題無し。</p> <p>(無解答率) 概ね良好な結果であった。</p> <p>(その他) 最も正答率の高かった設問は、「漢字を読む」問題であった。</p>	<p>国語B (領域ごと)</p> <p>①話すこと・聞くこと やや課題が残る結果であった。</p> <p>②書くこと やや課題が残る結果であった。</p> <p>③読むこと 課題が残る結果であった。</p> <p>④言語事項 出題無し。</p> <p>(問題形式)</p> <p>①選択式 やや課題が残る結果であった。</p> <p>②短答式 出題無し。</p> <p>③記述式 やや課題が残る結果であった。</p> <p>(無解答率) やや課題が残る結果であった。</p> <p>(その他) 最も正答率の高かった設問は、「目的に応じて本や文章を比べて読むなど、効果的な読み方を工夫する」問題であった。 「目的に応じて、質問したいことを整理する」の問題では、無解答が無かった。</p>
--	---

分析

1. 全体的な傾向

- ・漢字を問う設問については、読むことは概ねできているが、書くことについては課題がかなり見られる。
- ・「目的に応じて図と表とを関係付けて読む」ことはできているが、グラフをもとにわかったことを書いたり、自分の考えを書いたりすることに課題がある。
- ・無答率が全国に比べて高かった。

2. 全国との比較

- ・正答率は国語Bに比べて国語Aの方が高かった。国語に関する基本的な力は身に付きながらも、長文になると読解力が自らの考えを述べる力に結びつかず、課題があると考えられる。
- ・漢字を問う設問については、生活に根ざした言葉は特によくできていた。
- ・「登場人物の人物像について、複数の叙述を基にして捉える」設問では、概ね理解できていた。
- ・ローマ字を書いたり読んだりする力に課題がみられた。

○●算数・数学●○

算数・数学A

(領域ごと)

①数と計算

概ね良好な結果であった

②量と測定

概ね良好な結果であった

③図形

概ね良好な結果であった

④数量関係

概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式

概ね良好な結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

③記述式

出題なし

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

・もっとも正答率が高かった設問は「数と計算」であった。

算数・数学B

(領域ごと)

①数と計算

概ね良好な結果であった

②量と測定

概ね良好な結果であった

③図形

概ね良好な結果であった

④数量関係

概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式

概ね良好な結果であった

②短答式

概ね良好な結果であった

③記述式

概ね良好な結果であった

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

・無解答率の高かった設問は、理由を記述するものであった。

分析

1. 全体的な傾向

- ・評価の観点で見ると、数量や図形についての知識・理解の正答率が高い。そのため、知識の理解はできているが、活用することに課題があると考えられる。
- ・4つの領域が合わさっている複合問題の正答率が低い。記述式の問題でもあったためか無解答率が最も高かった。
- ・領域別に見ると、「数量関係」に関する設問の正答率が低い。
- ・問題形式の短答式の正答率が他の形式に比べて高い。

2. 全国との比較

- ・正答率では算数Aに比べて算数Bの方が低かった。算数の基礎的・基本的な力を、算数B問題の応用する力にまで高めていくこと、問題を読み取る力をつけていくことに課題がみられた。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

- ・国語Aは正答率が上がり、漢字等の知識については、一定の定着がみられた。一方、資料と関連づけて読んだり、自分の考えを書いたりすることに苦手意識を持つ児童が多く、無解答率も上がった。
- ・算数では、小数・分数のかけ算・割り算など基礎となる計算領域にも課題がみられたため、今後も反復練習を継続していきたい。

学力高位層と学力低位層についての分析

- ・国語Aの高位層の割合は昨年度よりも増加した。
- ・学力高位層と学力低位層の二極化がみられる。学ぶことに前向きな子どもたちの意識の育成と様々な授業づくりを今後も進めていきたい。

○●取り組み●○

学力向上に関する取り組み

1. 基礎的な学力の定着に向けて

①読書活動の充実

- ・朝の読書タイムや年2回の読書週間をさらに充実させる。
(担任も読書タイムに参加し読書を行う環境を作る、など)
- ・図書館支援員の配置により、休み時間に図書室を利用する児童が増えた。昨年度より貸し出し数はさらに増えており、読書活動を促す取り組みを今後更に充実させる。
- ・図書ボランティアと協力しながら、読み聞かせ活動の活性化を図る。
- ・学校図書館の整備を進め、図書館活用の更なる活性化を図る。

②朝の時間の学習活動の充実

- ・国語・算数における子どもたちの実態を的確に把握し、それを研究推進部会内で共通理解した上で、組織的により効果的な学習活動を推進していく。

③授業時間外の活用

- ・教員だけでなく、学習支援者などの外部人材や専門支援員の人材を活用し、休憩時間や放課後での学習機会を充実していく。
- ・宿題ができていない子どもへの補習機会を充実させる。

2. 授業の工夫改善に向けて

① 学習規律の定着

- ・今年度も学校から、家庭での学習方法について「生活・家庭学習のてびき」を作成し発信した。
- ・「持ち物チェック週間」を実施し、結果を学校だよりに掲載し保護者への働きかけを行った。
- ・全クラスに「話し方・聞き方」の掲示を行い、共通理解を図り指導を進めている。

②授業の工夫

- ・研究授業の他、必要に応じた校内研修を企画・設定し、教職員の資質向上を図る。
- ・授業の始まりに学習の課題を明確にし、終わりには授業の振り返りを子どもたちにさせている。
- ・ICT機器や掲示物を活用した視覚支援の充実を図っている。
- ・全体的に記述式の無解答率が高いので、授業の中で「記述する」時間を意識して確保し、また活用・応用問題にも取り組んでいく。

3. 保幼小中の連携を深める

①連携会議の充実

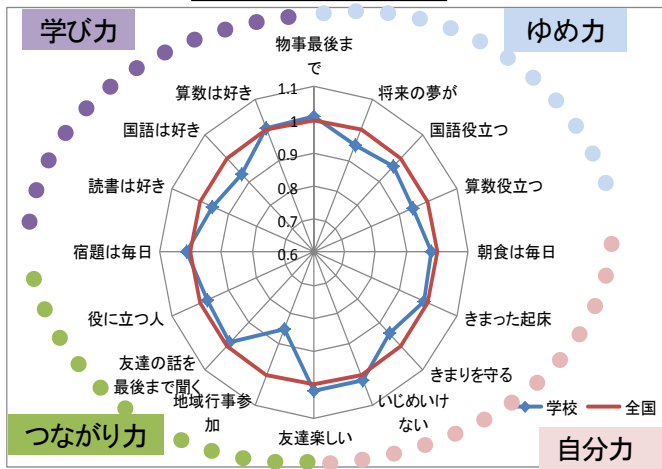
②合同授業研や合同研修会の開催と充実

③出前授業の推進

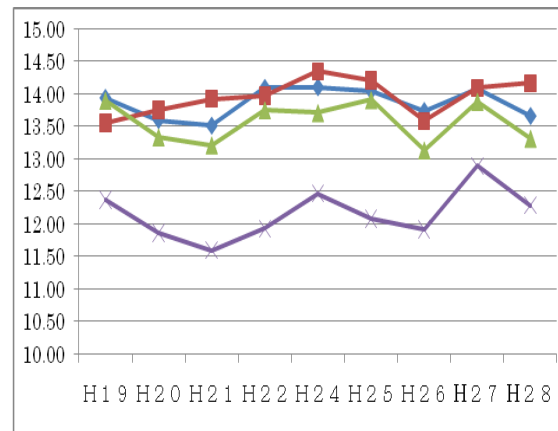
子どもたちに育みたい力



今年度の結果



これまでの推移



分析

- ゆめ力** 「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがある」への肯定的な回答は全国平均を上回っている。ただ、「将来の夢や目標を持っている」、国語、算数の「学習が役立つ」という項目への肯定的な回答は高いといえない。将来への夢を持てる、様々なことを学んでいきたい、と思えるようなカリキュラム作りを引き続き進めていきたい。
- 自分力** 「いじめはいけない」という項目は全国平均を上回っているが、他の「決まった時間に起床」「きまりを守る」「朝食は毎日食べている」の項目は全国平均を下回っている。このことから、規範意識の向上と生活習慣の見直しが必要と考える。
- つながり力** 「友達といえることはたのしい」の項目については全国平均を上回っている。他の3項目は下回っている。特に「地域行事に参加」の項目が大幅に低い。地域とのつながりをはじめ、いろいろな人とつながりあえる力は低いと考える。このことから、コミュニケーションの第一段階として、挨拶をする習慣の徹底が必要と考える。
- 学び力** ほぼ全ての子どもが宿題をやってくることができており、家庭とクラスとの連携がとれている様子が伺える。読書が好きではない子どもと国語が好きではない子どもが、全国平均を上回っており、長い文章を読み複数の資料から読み取った情報をもとに考えなければならない設問での読解力に課題があると考えられる。つながり力と学び力が連動しており、子ども同士の良好な支え合いの関係が学力底上げにつながる可能性もデータから読み取れる。

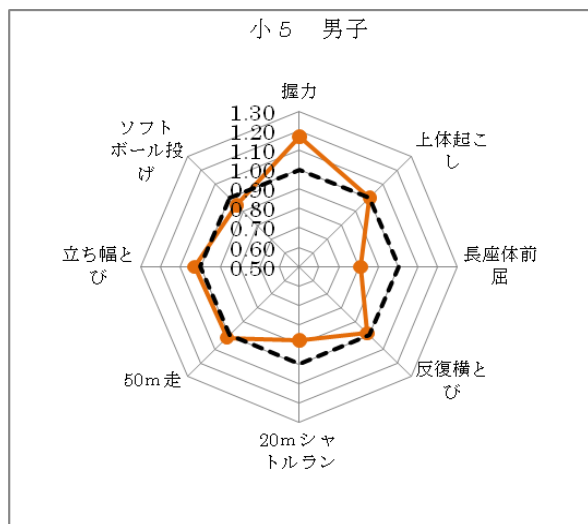
取り組み

- チャイム着席を意識させることで時間を有効に使い、日々の学校生活にメリハリを持たせる。また、日常生活の中で規則正しい生活を送れるように、保健指導や食育を充実と保護者や地域への啓発を進めていく。
- 色々な場面での人との出会いを通して、互いに認め合い、支えあう集団づくりをすすめる。日々の中で、お互いの気持ちを考えていけるような機会を増やしていく。また、地域とのつながりをより良いものにしていくために、日ごろから挨拶をする習慣をすすめ、地域との連携を深めていく。
- 個々の学力の底上げを意図し、ペア・グループ学習など、授業の中で子ども同士の横のつながりを意識した活動を推進していく。「生活・家庭学習のてびき」による保護者への啓発も継続して行っていく。
- 子どもの実態を踏まえつつ、自他を大切にできる「豊かな人権感覚」を身につける取り組みや、前向きに自らの生き方を考え、社会的、職業的自立に向けて必要な力を育てるキャリア教育を推進する。

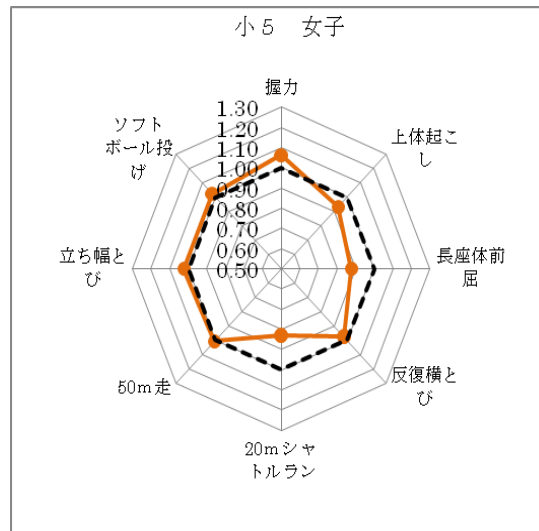
(2) 全国体力・運動能力、生活習慣調査

○●体力●○

男子 (小5)



女子 (小5)



分析

・体力テスト種目分析 (偏差値による)

(男子)・握力・立ち幅跳び・50m走・上体起こしは全国平均を上回った。

・全国、大阪府の平均に比べて、長座体前屈・20mシャトルランなどに課題が見られた。

・体力テスト全体の結果は昨年度を上回った。

(女子)・握力・ソフトボール投げ・立ち幅跳び・50m走は全国平均を上回った。

・全国、大阪府の平均に比べて、長座体前屈・上体起こし・20mシャトルランなどに課題が見られた。

取り組み

1. 茨木っ子運動の活用

・茨木っ子運動を、体育の時間の初めなどに全学年が継続的に取り入れる。

2. マラソン大会の取り組み

・日頃の体育指導の延長として、体力の増進を図ると共に、最後まで完走する忍耐力と持久力を養う。

・マラソン大会実施までの1週間をマラソン週間とし、25分休憩時、運動場のトラックを利用してマラソン練習を行う。25分休憩時放送をかけ、練習するよう呼びかける。

3. 体育指導の年間カリキュラム

・見通しをもって体育指導を行う為に、体育の年間カリキュラムを作成する。

4. 子どもが興味を持ち、意欲を持てる体育の授業づくりの推進

2

3年間の計画

(各校)

(ブロック共通)

	学力向上	体力向上	中学校ブロック連携
目標	学力向上に向けた取り組みの推進 学習習慣の定着	バランス良い運動能力の向上 運動習慣の定着	自己肯定感と思いやりのある子どもたちを育てる
平成26年度	<ul style="list-style-type: none"> ・図書ボランティアを活用するなどして、読み聞かせ活動の活性化をはかる。 ・朝の読書タイムの充実を図る。(担任も読書タイムに参加する) ・宿題の出し方を共通理解させるため、学校全体で検討を図る。 ・宿題が出来ていない子どもへの指導の手立てを学校として探る。 ・大学生や専門支援員などの外部人材を最大限に活用し、授業における個別の支援をより充実させる。 ・玉島スタンダードの充実・定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「走」の力を高める運動を体育の時間の初めなどに全学年が継続的に取り入れる。 ・「走」の力を高められた実感を見童に持たせるため、年2回程度、短距離走の記録会をもつ。 ・「跳」や「リズム感覚」を高めるため、縄跳びを使った学習を取り入れる。 	<p>「見合う・知り合う」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 連携担当者会議の開催 5月、6月、11月、3月に設定 それ以外にチーフのみで必要に応じて開催する。 2. 中学校ブロック合同授業研の開催 ・6月25日 玉島小の授業参観及び研修会(平田中) ・8月22日 玉島小と平田中の合同研修会(ビデオ研) ・11月25日 玉島小の研究授業&研究会(平田中参加) 3. 学校事務の共同作業 毎月1回程度実施 4. 連携教員による取り組み ・玉島小の授業参観と出前授業の実施(2月実施予定) ・小中の段差解消の段差を見つける。特に、小6年と中1年の教科によるノートや授業の進め方などに焦点を当てる。
平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館支援員を活用するなどして、読書活動を促す取り組みを充実させる。 ・学校から、家庭での学習方法について発信する。 ・宿題が出来ていない子どもへの指導の手立てを推進する。 ・玉島スタンダードの充実・定着を図る。 ・前年度の取り組みを見直すとともに、子どもたちの実態を踏まえた取り組みを推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・茨木っ子運動を、体育の時間の初めなどに全学年が継続的に取り入れる。 ・マラソン大会の取り組みの中で、マラソン週間に25分休憩の練習を行い、持久力の向上を図る。 ・「跳」や「リズム感覚」を高めるため、縄跳びを使った学習を取り入れる。 	<p>「目標と共通実践の決定」</p> <p>◎ 26年度の取り組みの継続</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 連携担当者会議の開催 ・会議を毎月1回に設定 ・出前授業の日程調整 2. 合同授業研の開催 ・中学校の研究授業(6月・12月) ・小学校の研究授業(11月) ・講演会(8月) ・中学校教員が小学校で研究授業 3. 連携教員による取り組み ・連携カリキュラムの作成 ・週一回玉島小で授業
平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の取り組みを継続するとともに、子どもたちの実態を踏まえた取り組みを推進していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の取り組みを継続するとともに、子どもたちの実態を踏まえた取り組みを推進していく。 	<p>「実践」◎ 27年度の取り組みの継続</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 連携担当者会議の開催 ・合同研修会に向けて 2. 合同授業研の開催 ・小中同時に交流での研究授業 3. 連携教員による取り組み ・連携カリキュラムの完成